

県勢

栄光の証言

下

全国高校サッカー100回

県勢で秋田商に次いで多い13度の全国選手権出場を誇る西目農・西目で監督を務めた柴田鐵四郎さん(75)にかほ市は、西目農のGKとしても1964年の第42回大会でピッチに立った。西目農にとって初の全国舞台で8強進出を果たした。

大阪市の鞆(うつぼ)公園サッカー場で行われた小野田工(山口)との1回戦。延長でも0-0のまま決着がつかず、主将の柴田さんは2回戦進出チームを決める抽選のため1人で大会本部へ向かった。PK戦で勝ち上

がりを決める方式が導入されたのは52回大会(74年)からだ。柴田さんは「抽選勝ち」を示すくじを引くと、もう1試合できることへの喜びが込み上げたが、うなだれる小野田工の選手が「気の毒で」と黙ってこらえた。本部を後にしベンチに戻って勝利を伝え、仲間たちは跳び上がって喜んだ。

習志野(千葉)との2回戦は守勢に回ったがディフェンス陣が踏ん張り、延長の末に0-0。2度目の抽選でも「抽選勝ち」を引き当てた。この時も敗者への気遣いを忘れな

敗者へ気遣い忘れず

かった。

柴田さんの紳士的な振る舞いは大会本部で評判だったという。準々決勝で優勝した藤枝東(静岡)に1-2で敗れたが、柴田さんはこの大会の優秀選手(11人)の一人に選ばれた。「泥くさいサッカーだったかもしれないが、できることを真面目に精いっぱいやれた」と

胸を張る。

一度は就職したが日体大で学び直し、体育教諭として岩手県の遠野高を経て75年に母校へ赴任。サッカー部の監督に就任した。

日本リーグのヤンマーに進み、超高校級ストライカーとして注目された小松晃さん(当時3年)が第59回大会(81年)1回戦の北陽(大阪)戦で決めた「50打シュート」は高校サッカー界の語り

草だ。ハーフウェイライン付近から蹴り出されたシュートが相手GKを越え、ゴールネットを揺らした光景は「今でも目に焼き付いている」と語る。「純真な高校生の時期に泣いたり歓喜にむせんだりした記憶は、一生の宝。教え子たちにも味わってほしい」。そう願い、駆け抜けた指導者生活だった。

(伊藤正孝)



西目農・西目で選手、監督として全国選手権の舞台に立った柴田さん

西目農全国8強 OB・柴田鐵四郎さん